

- 5) Ronéus, O. (1966). Studies on the aetiology and pathogenesis of white spot in the liver of pigs. *Acta. Vet. Scand., Supple. 16*
- 6) Taffs, L. F. (1968). Immunological studies on experimental infection of pigs with *Ascaris suum* Goeze, 1782. VI. The histopathology of the liver and lung. *J. Helminthol.*, 42: 157-172

住所: 〒501-32 関市倉知4909-58

福島県における豚病の動向

塩井一二三 (福島県郡山家畜保健衛生所)

Shioi, H. (1988). Trend of pig diseases in Fukushima. *Proc. Jpn. Pig Vet. Soc.* No. 14: 11-15.

1. 養豚の概況

昭和63年の福島県の豚飼養状況は3,330戸、417,000頭で1戸当りの飼養頭数は125.4頭である。飼養頭数は年々増加しているが、飼養戸数は急速な減少を示しており、年々多頭化の傾向にある。

10年前の昭和54年と対比すると戸数は9,420戸から3,330戸と35.4%に減少しているが、頭数は328,500頭から417,700頭へと逆に27.2%増加しており、1戸当りの頭数は34.9頭から125.4頭と約3.6倍になっており、著しい多頭化の傾向がみられる(表1)。

昭和62年の子取り雌豚は44,300頭で、ここ数年減少している。

表1 豚の飼養状況の推移

年度	飼養戸数	飼養頭数	1戸当り頭数
54	9,420	328,500	34.9
55	8,830	336,300	38.2
56	7,790	327,700	42.1
57	7,100	322,300	45.4
58	6,290	330,700	52.6
59	5,630	340,200	60.4
60	5,160	385,800	74.8
61	4,520	393,500	87.1
62	3,900	403,600	103.5
63	3,330	417,700	125.4

2. 防疫体制

本県では昭和44年4月に家畜保健衛生所(以下家保)の再編整備計画により20か所あった家保が6か所に整備統合され、各家保において防疫業務、衛生指導業務を行っているが郡山家保には病性鑑定課が設置され、各家保からの依頼により集中的に病性鑑定業務を行っている。

予防注射関係の事業は昭和47年7月に設立された福島県家畜畜産物衛生指導協会の傘下のもとに、各地域の家畜衛生推進協議会が自衛防疫事業として豚コレラ、豚丹毒、豚パルボ、TGE、AR等の予防注射を実施している。

本県の場合、日本脳炎の予防注射は県営事業で実施している。

豚コレラ、豚丹毒、日本脳炎の予防注射頭数の推移は図1に示すとおりである。豚コレラは昭和55年～57年に県内に発生したために、そのワクチン注射頭数も増加し55年度にはピークの68万頭に達したが、その後年々減少しており62年度には56.6万頭となっている。

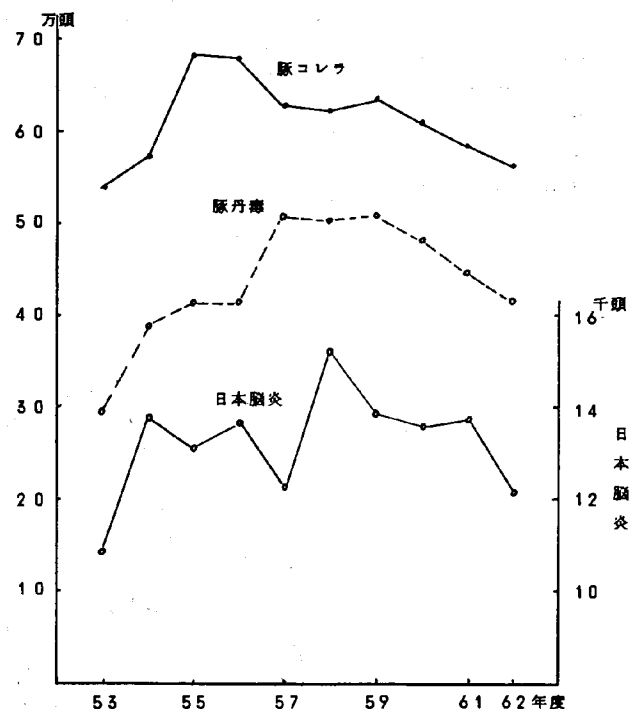


図1 予防注射頭数の推移

子豚生産頭数に対する豚コレラ予防注射実施率を見ると、農林統計から子取り雌豚数に年16頭の子豚を生産するとして算出した場合、56年度の86%をピークに減少し、近年は80%前後の実施率と推定される。

豚丹毒予防注射は子豚時に豚コレラと同時に実施するようになっているが実施しない農家もあり、昭和57年～59年度は約51万頭の実施率であったが、その後年々減少しており昭和62年度には41.8万頭で豚コレラのワクチンの実施率に対し73.9%にとどまっている。

日本脳炎は1万頭から1.5万頭を推移しており近年は減少の傾向にある。

3. 疾病の発生動向

1) 豚コレラ：昭和44年の発生以来、11年間発生がなく、生ワクチンの使用により終息したかに思われたが、昭和55年秋に関東各県および山形県と時を同じくして本県でも発生がみられ、昭和55～57年にわたり5件426頭の発生となった（表2）。

2) 豚丹毒：毎年多数の発生はあるが、病性鑑定課にあがってくる症例は少ない。これは各家保で診断したり、或いは慢性型のものがと畜場で発見される例

がかなり多く含まれているためと考えられる。

3) 豚赤痢, TGE: 昭和57年頃まで多発したが近年は減少の傾向にある。

4) オーエスキー

(1) 発生状況

本県におけるオーエスキー病の初発は昭和58年3月、県南地方の小規模一貫経営農場で認められ、4腹48頭の発生があったが、母豚22頭のオールアウトと肉豚の出荷によって清浄化された(図2-A)。

その後、発生に伴う県内の抗体浸潤調査では陽性農場はみとめられなかった。しかし、昭和60年1月に福島、郡山、白河管内(図2-B, C, D)の3戸6腹42頭に発生があり、広範な浸潤調査により発生した周辺農場に数戸の陽性農場が発見され清浄化対策が急務となった。

表2 家畜伝染病及び伝染性疾病の発生状況

畜産課調べ

			年	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
豚	コ	レ	ウ	件数			3	1	1				
				頭数			354	11	61				
豚	丹	毒		件数	1	3	1	2	4	8	11	5	9
				頭数	9	30	1	3	39	8	12	7	11
豚	赤	痢		件数	※	※	5	3	5		1		1
				頭数	※	※	51	66	63		14		588
T	G	E		件数	※	※	1		4				2
				頭数	※	※	250		597				441
オ	ー	エ	スキー病	件数						1(4腹)		3(6腹)	
				頭数						48		42	

※：不明

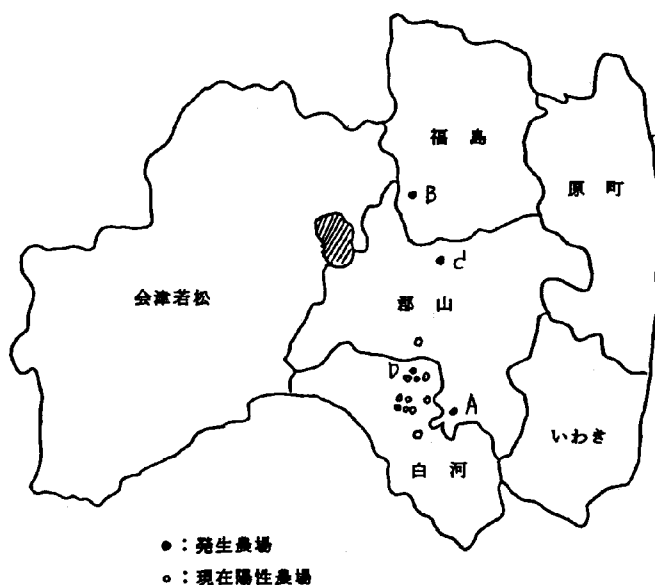


図2 オーエスキー病発生および抗体陽性農場

(2) 陽性豚の淘汰状況

陽性農場は自主的に陽性豚の淘汰を実施してきたが経営的に淘汰困難な農場も現われ、清浄化対策が行きづまったことから、オーエスキー病清浄化緊急対策事業を行うため「福島県オーエスキー病防疫対策協議会」を昭和60年12月に発足させ、基金を造成して淘汰豚に助成することになった。この基金から妊娠豚には50,000円、その他の種豚には30,000円を助成することにし陽性豚の淘汰を促進してきた。

本事業による60年度から63年度までの4年間の淘汰状況は実戸数22戸で794頭の淘汰を行い、2,436万円の助成を行ってきた(表3)。

更に本事業発足前の60年度中に自主的に淘汰した21戸329頭については1頭につき9,000円の見舞金を交付した。

このように助成金制度により清浄化を図ってきた

ことにより、陽性農場の減少に効果はあったが、陽性率の高い大型農場で経営上淘汰不可能な農場もみられるようになり、図2に示すように県南地方の一部ではあるが、現在でも2町3村11戸の陽性農場がある。

(3) 4年間の抗体検査成績

昭和60年1月の発生以来、県内一円の精力的な浸潤調査を行ってきた。

その結果、昭和59年度に、すでに発生のあった周辺農場でそれぞれ数戸の陽性農場がみつかり、発生農場も併せると15戸330頭の陽性豚となった(表4)。

昭和60年度には白河管内の陽性農場の増加と新たに、いわき管内に3戸加わった。

清浄化のための淘汰事業が進むにつれ、陽性頭数は昭和60年度をピークに昭和61年～62年度は著しく減少した。

4年間の合計は検査頭数20,962頭、陽性頭数1,508頭、陽性実戸数51戸であった。

63.11.1現在

年度	家保	福 島	郡 山	白 河	会津若松	原 町	いわき	計
60	戸数		3	9		1	2	15
	助成金		67	212		1	106	386
			2,550	8,360		30	3,220	14,160
61	戸数		1	8			1	10
	助成金		33	48			43	124
			1,050	1,600			1,290	3,940
62	戸数	1		3			1	5
	助成金	5		56			78	139
		110		1,560			1,660	3,330
63	戸数	1					1	2
	助成金	34					111	145
		710					2,220	2,930
計	戸数	2(1)	4(3)	20(15)		1(1)	5(2)	32(22)
	助成金	39	100	316		1	338	794
		820	3,600	11,520		30	8,390	24,360

注) 計の () は実戸数, 助成金は千円。なお60年度前期に21戸329頭自主淘汰を実施した。

() 内は陽性内数

年度		福 島	郡 山	白 河	会津若松	原 町	いわき	計	摘 要
59	戸 数 頭 数 実戸数	175(3) 2,262(117) (3)	84(7) 626(77) (6)	82(7) 771(136) (6)	69 306	21 247	6 110	437(17) 4,322(330) (15)	
60	戸 数 頭 数 実戸数	49(1) 1,440(51) (1)	35(6) 333(73) (5)	230(38) 2,386(474) (20)	39 513	81(1) 2,369(1) (1)	40(7) 576(283) (3)	474(53) 7,617(882) (30)	169件
61	戸 数 頭 数 実戸数	50(2) 1,025(8) (2)	35(1) 325(47) (1)	91(12) 759(51) (6)	42 572	77(1) 2,242(1) (1)	46(2) 378(17) (2)	341(18) 5,301(124) (12)	153件
62	戸 数 頭 数 実戸数	34(2) 847(7) (1)	12 176	48(4) 311(51) (2)	33 275	70 1,767	19(1) 346(114) (1)	216(7) 3,722(172) (4)	114件
合計	戸 数 頭 数	(実戸数)						1,468 (51) 20,962 (1,508)	

4. 病性鑑定実施状況

細菌性の疾病ではヘモフィルス感染症(胸膜肺炎)、大腸菌症、豚丹毒等が多発疾病としてあげられる(表5)。

豚丹毒は届出数と比べると少なくなっているが、これはと畜場で発見される慢性型症例が多いためである。

いっぽう、豚萎縮性鼻炎、浮腫病、アクチノマイセス症等は減少し、ここ数年鑑定依頼はない。

最近、レンサ球菌症の発生がみられるようになり、Streptococcus suis type I, type II が分離されている。

ウイルス性疾病では伝染性胃腸炎が最も多発しており毎年のように発生がみられる。

豚コレラは昭和55年～57年度に5件の発生があった。

オーエスキー病は57年度1件、59年度に3件、計4件の発生があった。

他にインフルエンザ、ロタウイルス病もみられた。

日本脳炎による異常産は54年度2件、57年度4件であった。

60年度には異常産の発生が多く十数件の病性鑑定があり(表6)、その中には日本脳炎の抗体価が高いものが多く含まれ、日脳ウイルスによる異常産と思われるものが散見された。

62年～63年度におこなった日本脳炎の流行調査では62年度には広範な流行(2ME陽性)がみられ、63年度には一部地区で流行がみられた。

豚の主要疾病は徐々に増加したが、56年度および57年度をピークに減少の傾向がみられる。

いっぽう、表6は過去3年間の病性鑑定実施状況を示している。60年度に57件あったが62年度には36件に減少し、病性鑑定における全家畜に対する豚の割合は29%から18%に減少した。その中で、59年度からはオーエスキー病発生に伴う抗体検査業務がかなりの比重を占めるようになった。

5. 衛生上の問題点

以上、福島県の豚病の動向について簡単に述べたが、何と言っても現在、最も大きな問題はオーエスキー病である。

昭和60年1月に発生したオーエスキー病は福島県独自の助成制度により淘汰を進めてきたため、かなりの清浄化が図られたが、県南地方の一部に現在も10戸ほどの陽性農場がある。

これらは飼養規模が大きく淘汰による経済的負担が大きいことや、再感染の不安等によって清浄化に踏み切れないためである。

陽性農場については汚染拡大防止のため閉鎖的飼養と肉豚、種豚の出荷は県内の指定と畜場に限定し、定期的な豚舎消毒を指導している。

本県においても養豚は急速な多頭化傾向にあり、今

表5 豚主要疾病病性鑑定状況(件数)

		年 度											
		51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
豚	コレラ	1				3	1	1					
豚	伝染性丹毒	3	1	1		1	2		1		1		
豚	大腸菌	1	1	2	2	2	1	3			2	1	
豚	オースキー					1	4	1			2	2	
豚	日本脳炎				2			4		3			
豚	浮腫	2	1			3					1		1
豚	萎縮性鼻炎	4	1	1	3		2						
豚	コリネ(アクチノマイセス)	1		1		2	2			3			
豚	大腸菌	1	1		2			5	7	3	2	1	2
豚	レジオネラ	1		1							1		2
豚	肺炎			2	2	5	9	3	3	1	1	2	2
豚	胸膜肺炎			1			2	1		4	4		
豚	イロ							5	1			1	

表6 病性鑑定実施状況

疾 病 名	年 度	60		61		62		計	
		件 数	頭 数	件 数	頭 数	件 数	頭 数	件 数	頭 数
豚	丹毒	1	3					1	3
豚	大腸菌	2	5	2	3			4	8
豚	胸膜肺炎	2	15	1	8	2	8	5	31
豚	レジオネラ	4	5	2	5	3	6	9	16
豚	抗グ	1	8			2	5	3	13
豚	脳増殖	1	2			1	3	2	5
豚	抗グ	1	1					1	1
豚	抗グ	1				2	2	3	3
豚	抗グ	1	2	1	1	1	3	3	6
豚	抗グ	1	1	1	3			1	3
豚	抗グ	1	1			1	2	2	3
豚	抗グ	1	3	1	1			2	4
豚	抗グ	2	10	1	4			3	14
豚	抗グ			1	5			1	5
豚	抗グ	8	43	3	19			11	62
豚	抗グ	2	8	2	7	2	13	6	28
豚	抗グ	13	143	7	52	5	37	25	232
豚	抗グ	17	124	21	88	17	50	55	262
豚	抗グ	57	373	44	197	36	129	137	699

後益々大型養豚場が増えるなかでは予防を主体とした衛生管理サービスが業務として重要と思われる。

現在でも一部農場には実施してはいるが、県内一円的に、しかも定期的に巡回し、疾病の浸潤調査、疾病予防プログラムの指導の徹底が豚疾病の清浄化のために大切であろう。

住所：〒963 郡山市富田町字満水田 2
